【研究ノート】

台湾における災害展示と民族アイデンティティとの関係

呂　怡屏

総合研究大学院大学　文化科学研究科　比較文化学専攻

要　旨

本稿の目的は、台湾において1999年に生じた大規模な地震である「九二一大地震」の後に作られた「九二一地震教育園区」と、2009年の台風に伴う土砂災害である「八八水害」の後に作られた博物館展示の内容を比較検討することである。前者が自然災害をもたらした環境と文化財への影響に対する意識を高め、後者がさらに台湾における原住民族の課題と深く関わってきたことを明らかにする。これにより、災害に関連して建設された博物館やその展示が、災害という課題だけでなく、地域の住民や民族集団のアイデンティティに影響を与えていく作用を有することを論じる。

台湾では、1980年代に社会全体で民主化が進行した。人口の大多数を占める漢族系の住民に対して少数派であったオーストロネシア系の先住民である原住民族の間にも、「人権」、「土地権」、「自治権」、「言語・文化権」などへの意識が高まり、それらの権利回復を目的とする「原住民族運動」が社会運動として生じた。1994年の憲法改正により、原住民族の権利や文化を尊重することが求められるようになり、台湾各地で当地の民族の文化や歴史を展示するための地域原住民族博物館の建設が活発に進められた。

1999年9月21日の九二一大地震以後、台湾の博物館は真剣に災害とその影響をテーマとして取り扱うようになった。このような中で、2009年、八八水害による自然的・文化的な被害が生じたことで、九二一大地震が起こった十年後、もう一度災害と人間の関係、そして被災地における文化と生活の再建への関心を人々の間に呼び起した。特に甚大な被害を受けた平埔原住民のシラヤ系タイヴォアン人の文化を再興するため、台湾の公立の博物館は、社会教育および文化保存・伝承を担う機関として、災害救援と文化復興に協力した。その中で、被災した小林村と同じ自治体にある高雄市立歴史博物館は、小林平埔族群文物館が完成するまでの準備と企画に取り組んだ。

小林平埔族群文物館の常設展示の企画チームは被災者の意見を取り入れ、村の歴史を踏まえたうえで、昔の小林村の生活を再現することにした。展示の企画立案の過程と、実際に完成した展示は、現地住民の民族的アイデンティティを呼び起こすことに影響を与えたと考えられる。筆者は本論を契機として、開館後の文物館と村民とのコミュニケーション、および展示の中に盛り込まれなかった災害をめぐる経験と記憶の継承のありかたを研究課題として注目し続け、さらなる検証を重ねていきたい。

キーワード：災害博物館、博物館展示、平埔原住民族、タイヴォアン人、民族的アイデンティティ

1. はじめに
2. 台湾の原住民族運動
2.1 台湾の民主化と原住民族運動
2.2 平埔原住民族の文化復興の動き
3. 九二一大地震後の博物館の社会参加
3.1 九二一地震教育園区の設立経緯
3.2 九二一地震教育園区の建設と展示企画
4. 八八水害後の小林村における文化復興と博物館展示
4.1 小林村の自然環境と八八水害
4.2 博物館が協力した小林村の文化事業
4.3 小林村に関する企画展示
5. 小林平埔族群文物館の展示の経緯
5.1 3つの移住地に分けられた村民と文物館
5.2 再建された記憶の中の家と村民の思い
6. 考察
7. まとめ

1. はじめに

本稿の目的は、台湾で災害後に設立された2つの博物館の展示の内容を比較検討し、災害博物館が台湾原住民族の民族的アイデンティティを呼び起こすことに与えた影響、およびその変遷を検証することである。比較する具体的な対象は、1999年に生じた大規模な地震である「九二一大地震」[1] の後に作られた「九二一地震教育園区」と、2009年の台風に伴う土砂災害である「八八水害」[2] の後に作られた「小林平埔族群文物館」である。前者が自然災害をもたらした環境と文化財への影響に対する意識を高めたこと、後者がさらに台湾における原住民族の課題と深く関わってきたことを明らかにする。

台湾は地震、水害などの自然災害が多発する地域である。1999年の九二一大地震以降に、自然災害が発生した後の文化財救出とコミュニティの再建に関わって博物館が設立されるようになった。それにともない、博物館における自然災害の展示、および救出された文化財に関わる展示をめぐる検討が行われるようになった。

台湾の博物館研究において、災害展示に関する議論は概ね2つの視点から行われてきた。1つは博物館における防災対策と災害後の対応についての研究、もう1つは博物館の展示が示す自然災害像の研究である（王　2002）。自然災害についての展示には自然科学の知識、災害後の復旧、被災・救助経験の伝承という3つのテーマがみられる（劉 2013; 呉 2006）。このなかで、自然科学の知識と災害後の復旧に関する展示には理念的で、教訓的な内容を重視するものが多い。一方で、被災・救助経験を軸とした展示には、来館者に対して情動に訴える要素を入れて来館者との共感を呼び起こそうという意図がうかがわれる（王 2012: 171）。

ところで、災害をテーマとした展示を行う博物館は、その災害が発生した地域に作られることが少なくない。したがって、災害展示をもつ博物館について考えるうえでは、地域博物館という視点も必要となる。

地域博物館には地域の人びとが地域づくりに向かうように支援するという役割がある。博物館が存在する地域の歴史、文化、祭祀など、様々な地域情報の発信により、地域の人たちが自分の暮らす地域について考えるきっかけを作ることができるようになるとされている（布谷 2011: 195–196）。

本稿でとりあげる地域博物館の1つは、特に民族アイデンティティと深い関わりがあるという点において特徴的である。災害の経験を展示する博物館は、予測できない災害をめぐる経験や記憶を伝えることを試みると同時に、災害前後の地域の歴史と日常生活とを展示する。これは、地域住民に対し、地域に対する思いを強く呼び

起こし、文化的、社会的な一体感を再形成する役割を博物館が担いうることを示唆する。展示の観覧だけでなく、博物館の展示企画への参画も博物館から地域の人々に様々な情報が伝わる手段となる。また、展示を通じて、災害の体験者だけでなく、体験者以外の他の人々に被災の経験、災害の記憶や復興の過程を伝えることを可能とする。

本稿では、こうした視点で、災害を展示の主題としている博物館における社会発信とその発信内容の変化、そうした営みが民族的アイデンティティの形成にどのように関わるのかという視点から「九二一大地震」と「八八水害」の後の、それぞれの地域に建設された博物館について考えてみたい。

2. 台湾の原住民族運動

2.1　台湾の民主化と原住民族運動

台湾では、17世紀以降漢民族系の移民が大量に移住しはじめ、それ以前から台湾に住んでいたオーストロネシア系の先住民[3] に接触した。こうした先住民の子孫にあたるのが、現在、台湾において原住民族とよばれている人たちである。

2016年9月の台湾内政部の統計により、台湾で公的に認定される原住民の人口は551,000人あまりで、総人口数の2.34％を占めている。1980年代になると、台湾社会全体で民主化が進行するなか、原住民族の中で「人権」、「土地権」、「自治権」、「言語・文化権」などの権利の意識が高まるとともに、権利回復を社会に要求する声が高まっていった。出稼ぎや就学のために都市部で生活するようになった原住民族の人たちが中心となり、先住民としての主体性を社会の中で確立することを目指す社会運動を開始した。

当時、山岳地域に生活しているという意味の「山胞」とよばれていた原住民族の大学生やキリスト教の関係者らは、当時の「党外勢力」[4] の支持を得ながら、1984年12月に「台湾原住民権利促進会」を発足させた。1987年には「台湾原住民族権利促進会」と名称を変えて、1988年に「民族・集団としての権利」を強調した「台湾原住民族権利宣言」を発表した。この宣言の中では「人権」、「土地権」、「自治権」、「言語・文化権」などの重要性が謳われている。政府は原住民側からの要求を受け入れていき、「原住民族」という名称が憲法の追加修正条文に登場した。

2.2　平埔族の原住民族運動

台湾原住民族の権利回復運動が進む一方で、その動きから切り離された先住民族が台湾には存在する。平埔族とよばれてきた人々である。平埔族とは単一の民族の名称ではなく、台湾のオーストロネシア系諸民族のうち、漢化の進んだ集団の総称である。清朝時代（1636–1912）から日本統治時代（1895–1945）のはじめにかけては「熟番」、「熟蕃」と称された。日本統治時代には平埔族という名称が一般に用いられるようになった（清水 2005: 106–107）。

平埔が平地を意味する言葉から理解できるように、平埔族の祖先集団は台湾の北部から西部にわたる平野部に居住してきた。このために、清朝時代には対岸の大陸中国からの漢族移民との接触の機会が多く、また交易等を通した外部社会からの影響を、山岳地域に住んでいた原住民族集団よりも強く受けてきた。

平埔族のもつ固有の文化要素は希薄となる一方で、漢族系移民と競合するなかで、土地や財産を失うものも少なくなく、もともとの居住地から内陸部や東部地域へ移住する集団も生まれていった。こうした平埔族の歴史は、中国正史を歴史とする国民党政権下の台湾では軽視されてきたが、民主化の進行にともない、台湾史への関心が高まり、台湾の歴史の中に平埔族をどのように位置づけるのかという課題に積極的に取り組まれるようになった。1990年には、当時、中央研究院の潘英海が「平埔研究工作小組」という研究グループを組織し、1998年には在野の研究者である劉還月が「台湾平埔族学会」を設

立し、個人のレベルではなく、多くの研究者が平埔族の研究に関わっていく環境が整備されていった。

平埔族の人々のアイデンティティは社会環境にしたがい、常に変化しているといわれる（洪麗完　2009）。そうした中で、法的に認められた地位を獲得するために、1991年、平埔族の一族であるクヴァラン人が自分たちの文化の根源を求め、故郷に戻って、原住民族の正名運動および文化復興運動をおこなうようになった[5]。

1994年6月23日に行われた原住民族による『「正名権」、「土地権」、「自治権」に関わる要求を憲法に入れることを求める』というデモには各平埔族の代表も参加した。しかし、1990年代前半まで、平埔族の政治的権利に関する要求が受け容れられることはなかった。そのような現実の中で、平埔族の原住民族運動のリーダーたちは、まずエスニック集団内部の一体感を高めようとした。そこで、故郷に帰って、まずは自分たちの文化復興を目的とする活動を始めた。

原住民族運動の中に各平埔族に関する研究と、文化復興の動きが現れるきっかけには3つがあげられる。ひとつは学者の関与である。1990年、中央研究院に勤めていた潘英海は「平埔研究工作小組」という研究チームを形成し、さらに1998年に民間研究者の劉還月は「台湾平埔族学会」を設立した。その後、平埔族をめぐる研究が歴史研究者の間で徐々に注目されてきた。研究成果が発表されていくにつれ、政府も平埔族に目を向け始め、文化的な事務を支援するようになった。次に、地方自治体、とくに台南市が各平埔族の文化活動に補助金を交付したことがある。第三は博物館の取り組みである。1990年代半ば以降、民間研究者である劉還月、大学教授の簡文敏や、地域と国立の博物館は展示を通じて地方文化の教育、平埔族文化の振興に取り組んできた。2000年代に入って、2001年にサオ族[6]と2002年にクヴァラン人[7]が正式に政府認定の台湾原住民となった。しかし、その後、平埔族の言語と文化振興をめぐる政策が出されたが、登録される戸籍は「平地原住民族」ではないため、正式に台湾原住民として認定する動きは進むことができない。

3. 九二一大地震後の博物館の社会参加

台湾では、1999年に発生した「九二一大地震」が、博物館事業の実践、すなわち、資料の保存、展示、教育と社会との関係を改めて考えるきっかけになったとされている（王 2003: 147）。「九二一大地震」とは、1999年9月21日1時47分、台湾中部の南投県の日月潭から12キロ離れたところを震源とするマグニチュード7.3の大地震である。この地震の死者および行方不明者は合計2,505人で、84,000棟の建築物が全壊または半壊し、経済的損失は3,600億台湾ドルに上るとされている。主な被災地は西部の南投県、台中県、台中市、雲林県、嘉義県、苗栗県であり、大半は漢民族の人たちの生活地域である。原住民族の人びとが暮らしている地域の被害範囲は相対的に小さかった。地震発生後、中央政府は直ちに「九二一地震中央対処センター」を設立し、各地の災害救助に関わる事項をおこなった。さらに、原住民族委員会は被災した原住民族の学生に補助金を提供し、原住民族の集落を再建設する作業にも力を入れた。

九二一大地震の後、台湾の博物館は社会的課題や事件に関心を払うべきとされ、自然災害を展示の中心とする「九二一地震教育園区」が設置された。一方、特別展示を通じて災害に関連する課題を提起するものもある。主な展示は、地震という予測できない災害が生じた原因、防災知識、歴史的・文化的意義をもつ建築物の保存などの課題に注目した。

3.1　九二一地震文化園区の設立経緯

震災後、人命を救うという作業が段階的に終了した後に、文化財などの救出・保護も開始された。その時点での博物館の動きの中心は、文

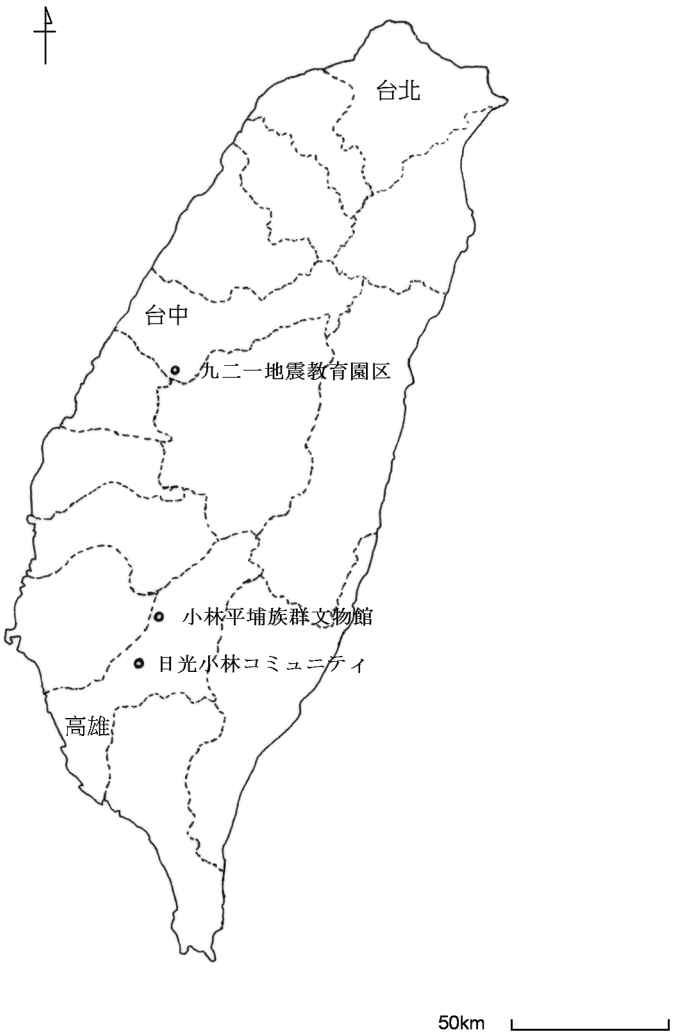

図１　九二一地震教育園区と小林平埔族群文物館の位置

化財などの救出、整理、修復、及び特別展示やシンポジウムの開催であった。例えば国立台湾歴史博物館準備室（現在の国立台湾歴史博物館）と国立歴史博物館は被災地にある倒壊した歴史的建造物とその中の器物の救出、修復を行った。この動きの中で、震源地の南投県のもっとも近くにある国立自然科学博物館も災害後の文化財救出に取り組んだ。その後、2000年に台湾の教育部の指導により、国立自然科学博物館は「九二一地震教育園区」の企画立案を担当した。

九二一地震教育園区の企画チームには博物館研究の専門家、建築家、展示デザイナー、博物館管理の専門家などの人が含まれた。当初、九二一地震教育園区の設立目的について、中央政府は科学教育をおこなうとともに、防災意識を高めようと目標を設定した。地方政府は九二一地震教育園区を企画することで、当該地域の再建設や経済にプラスの効果をもたらすことができると考えた。2000年8月に園区を企画する前に、チームの成員は日本と中国に赴き、災害に関する博物館・記念館を視察した。そのなかで、日本の北淡町震災記念公園の展示の方法を参考にして、台湾でも地形が変形した台中県霧峰郷光復中学校の敷地に博物館を建てることを決めた。光復中学校の敷地が断層帯を横断しているところにあたり、地表断層とともに倒壊した校舎を保存しようとしたのである。

しかし、九二一地震教育園区の企画初期に、

地域住民は参加できなかった。そのため、きわめて多くの人が亡くなった大きな災害について、記録を残すために光復中学校の敷地に博物館を建設するという政府の提案について、当初、地域住民は深い疑いと不信感をもった。このときの地域住民が反対する理由は4つに挙げられる。第一に、住民たちは、地震の後に自分の生活空間が断層を見にくる観光客に侵入されることに不満があった。第二に、九二一地震教育園区を設置すれば、住民が強制的に移住させられるかもしれないので、光復中学校の近くに住んでいる住民たちはこの計画に強く反発した。第三に、住民が移住させられたら政府は地震教育園区の敷地を財団に売却するという噂に対して、住民はこの計画に大きな不信感を抱いた。第四は、九二一地震教育園区を設置するより被災地の環境や被災者の生活を改善することが最優先すべきではないかという考えがあった（周 2002: 21–22）。

住民側が反対意見を出すにつれ、政府側は住民の意見を視野に入れて、問題解決のための取り組みをおこなった。まず、2000年5月から、地方政府は断層地域にあたる光復コミュニティの周辺の観光活動に制限をかけ、住民の生活環境を維持することとした。続いて、光復コミュニティの住民と話し合いをしたうえで、光復コミュニティの再開発計画を取り消し、住民の不安を取り除いた（周 2002: 22）。さらに、2000年9月に、教育部（日本の文部科学省にあたる）の副部長范巽緑、地域住民代表、展示企画チームの代表が日本へ視察に赴いた。住民代表は日本の北淡町震災記念公園の実際の様子を見て、地震後残った痕跡としての断層帯を保存する重要性、および震災遺構の保存を通じた町づくりと地域経済復興の可能性を感じた。台湾に戻ってから展示企画チームは地震博物館の展示内容の概要を作成した。その後、教育部副長官と展示企画チーム代表は再び説明会を開き、もう一度地域住民と懇談した。2000年5月以降、住民側と政府側の話し合いが始まり、また9月の視察の内容を説明することによって、九二一震災でひどく被災した地域にある光復中学校の敷地に、博物館を建設することに対する反発も徐々に静まった（張 2003: 142–144）。博物館建設の経費を支援したのは日本の内閣府にあたる行政院に設けられた「震災災後重建推動委員会」（2000年～ 2006年）、教育部、および民間機構による「TVBS関懐台湾文教基金会」という3つの機関である。博物館の建設地が決まったのち、博物館の建築設計と展示内容の企画も立案され始めた。

3.2　九二一地震教育園区の建設と展示企画

九二一地震教育園区の建設の過程は、3つの時期に分けられる。第一期の2000年から2002年は、震災遺跡を保存することを第一の目的とし、光復中学校の敷地で車籠埔断層保存館、倒壊校舎を観察するための廊下歩道を建設した。第二期の2002年から2003年は、来館者が地震を追体験できるよう、地震映像館の建設と倒壊校舎の保存をおこなった。第三期の2003年から2004年は、地球科学と防災観念の教育・普及を目指して、防災教育館を建設した（張 2003: 147–149）。

2007年に全面開館した九二一地震教育園区の使命は、九二一地震の遺構を保存し、地震をめぐるモノを収集することによって、自然科学・文化保存・歴史記録の3つのアプローチから展示と教育活動をおこなうことである。地震発生の原因、地震と人間生活の関係を展示することで、来館者に防災意識の徹底をはかり、人間同士の助け合いの重要さを伝えようとした。

上記の博物館の使命に応じて、九二一地震教育園区の展示は、1）活動している断層―「車籠埔断層保存館」、2）地震教育館、3）地震の揺れる力や地震の時の環境を体験する「映像館」、4）防災教育館、5）助け合う人々の様子と物語を表す「復興記録館」（重建記錄館）の5つに分けられている。来館者は展示を、室外の運動場と校舎遺跡から、室内の展示館に入るという順に見

写真１　車籠埔斷層保存館

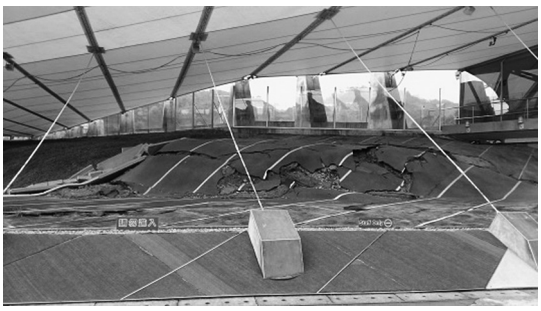

写真２　光復中学校に横断する車籠埔断層の様子

学することにより、地震に関する知識を得ることができる。それによって、正確な防災意識を獲得でき、地震が起きた際の自己対応もできるようになると考えられた（陳 2013: 93–94）。

こうした「九二一大地震」に関する博物館の一連の動きを契機に、台湾での災害に関わる博物館の設立や展覧会が始まった。九二一地震教育園区以外に、2000年九二一大地震の被災地である桃米村の「震災記念館」が設立され、2013年に地質学に関する知識を伝授するとの考えから近くの竹山鎮に「車籠埔断層保存園区」も開園された。

中央政府が自然災害をテーマとする博物館を新たに設立する一方で、一般の博物館は様々な特別展や企画展を催した。たとえば、国立台湾博物館で開催された特別展「天旋地轉―認識臺灣天然災害特展（台湾の自然災害を知る）」（2009年）、国立歴史博物館でおこなわれた特別展「搶救文物―九二一大地震災區文物研究展（文化財の救出―九二一大地震の被災文化財をめぐる研究）」（2000年）があった。または国立自然科学

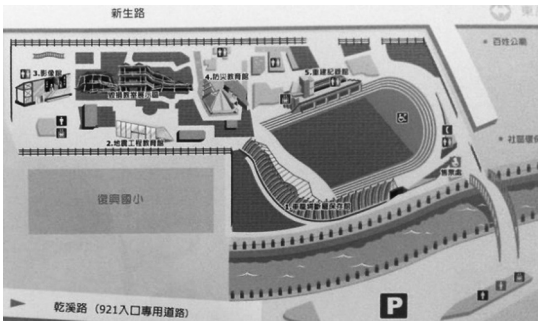

写真３　九二一地震教育園区の平面図

博物館で実施された特別展「地動驚魄九二一―集集大地震專題展示（九二一集集大地震特別展）」（1999年）、「九二一災後家園重建特展（九二一災害後の生活再建特別展）」（2000年）、「台風來了（台風が来た）」（2011）、「變動的地球與防災科技特展（変動する地球と防災技術特別展）」（2011）、「震儀天下―九二一十五週年地震儀觀測歷史演化（震儀天下―九二一地震十五周年―地震の観測の変遷）」（2014年）などがあった。

4. 八八水害後の小林村における文化復興と博物館展示

1999年の九二一大地震の後に、もっとも大きな被害をもたらしたのが2009年の八八水害である。2009年8月7日にモーラコット（Morakot）台風が台湾を襲い、8月8日から9日にかけて中南部や東部に豪雨が降り続けた。その結果、南投、嘉義、台南、高雄、屏東、台東など6つの県に土砂災害などによる大きな被害が出た。これが通称「八八水害」と呼ばれるものである。八八水害により、約90の原住民族の村が深刻な被害を受け、災害救助と補償を原住民族委員会が中心になって対応したが、原住民族による抗議や行政との衝突も生じた。「尊厳ある復興」の主張、移住地の選定も含めた移住政策に対する抗議が起こり、被災集落が国家賠償を求めて行政訴訟を起こす場合もあった。

一方で、被災地域の台南、高雄、屏東は平埔族に分類されてきたシラヤ族が居住する地域である。高雄市内の荖濃溪と楠梓仙溪流域沿いの

桃源区、六亀区、甲仙区と杉林区が大規模な水害や土石流に襲われ、これらの地域に居住していたシラヤ族の生活に深刻な影響を与えるとともに、地域で育まれてきた文化はその存続の危機に瀕した。そのなかでも、もっとも甚大な被害を受けた高雄市甲仙区小林村における災害復興に博物館がどのように関わってきたかを次に述べていく。

4.1　小林村の自然環境と八八水害

小林村に居住してきたのは、シラヤ族のなかでもタイヴォアンとよばれてきた人々である。小林村は1915年甲仙埔事件後に、参加したタイヴォアン人を定住させるため、クスノキを伐採する人びとの集落の周辺に移住して、新たに作られた村である（林 2015: 188）。新たな居住地は、現在の高雄市の北東の甲仙区に位置し、玉山山脈と阿里山山脈に挟まれて、楠梓仙渓の左岸に位置する細長い沖積地に立地する。周辺地域は山林が占めている。かつての小林村は主な居住地である小林集落と五里埔集落、南光集落、錦地集落および埔尾集落で構成されていた。被災前の村の空間配置は日本統治時代に定められ、インフラの整備とシラヤ文化に関する町づくり（祖先を祭る場所とする公廨など）は、1990年代に進められたものであった。当時の住民の大部分はタイヴォアン人である。

八八水害における小林村の被害はその甚大さで台湾中に知られている。村の背後にある献肚山で発生した深層崩壊によって、村の大部分が土石流の下敷きとなった。当時、小林村に住んでいたのは約500人であったが、生存者はその約十分の一であった。災害救助と生活の再建活動が進むにつれ、中央政府は、被害が甚大であった小林村が平埔族の村であったことを主な理由に、同地を台湾南部の平埔族文化の復興拠点として選定した。「災害前にシラヤ系の生活様式をよく保っていた小林村村民の新しい居住地で、文物館を設立することにより、平埔族文化を復興するとともに、一般の人に平埔族の歴史文化を理解してもらいたい」（李　2010）という目標が定められた。一方で、平埔族は原住民族としては認定されておらず、政府は小林村に関する文化復興の事業を原住民族委員会ではなく、文化行政一般を所掌する文化建設委員会（現在の文化部）に担当させた。

そのほかの活動としては、八八水害後の8月16日に研究者[8]が中心となり「小林平埔文化復興委員会」設立準備会を立ち上げた。そして、2010年1月10日に中央政府の認可により「小林平埔原住民族文化重建協會」（小林平埔原住民族文化再建協会）が設立され、文化再建・復興の支援が行われた。協会の支援の特徴は、インフラ整備や経済的支援といった行政が一般に行うようなものではなく、例えば、小林村の住民を被災した経験のある原住民族の村に案内し、災害後の再建の過程で生じる問題について意見交換したり、対応策を検討したりすることにあった（黄 2011: 136–137; 林 2015: 187–188）。

4.2　博物館が協力した小林村の文化事業

八八水害が原住民族の社会に与えた影響についての学術的な関心は高く、とりわけ、壊滅的な状況が生じた小林村については、従来の文化を滅ぼしてしまうのではないかという危惧が生じたため、台湾の中央研究院が気象、政策、民族の3つの側面から、未来へ向けての長期的な調査を計画した[9]。並行して、平埔族に関する研究資料と収蔵品をもつ博物館側も文化財の保存と復興のために動き始めた。

文化建設委員会は小林村の文化と生活の再建を目標とする「小林平埔文化重建計画」をたて、その中心となったのは国立台湾博物館[10]である。国立台湾博物館はシラヤ族に関係する資料をもつほかの機関と連携しながら、小林村の住民に対してインタビュー調査、災害後の復旧をテーマとしたシンポジウム、小林村のタイヴォアン人の文化に関する特別展「小林平埔文化」を実

施した。

一方、行政院に臨時に設けられた「モーラコット台風災害後復興推進委員会（現地名：行政院莫拉克台風災後重建推動委員会）が主導し、復興住宅を被災地の周辺に建設する「高雄県甲仙郷五里埔開発案」が立案され、その中に「平埔族文化園区」建設の企画が盛り込まれた。園区には、平埔族群文物館、平埔族の信仰の中心となる「公廨」の建設が予定された。

このほか、文物館から1キロの場所に公園の造営が計画された。以前の小林村を眺めることができる川の対岸の地域を整備して、記念碑を建てるのみならず、一世帯分ずつ黒い石を置き、木を植えて、目に見える形で水害を記憶に残す施設が作られた。

文化と生活を再建するために、モノ・記憶に関する「小林文化史料保存と映像記録計画」も進められた。小林村に関する歴史と文化を伝承していくために、歴史資料の保存と記録映像の製作が進められた。2010年6月までに、小林村に関する古い写真と災害当時の写真、約1200枚が収集され、撮影した動画は108本（約108時間）、平埔族の生活用具227件（大部分は年寄りにより再製作されたものである）に達した。こうして、小林村のタイヴォアンの人々の文化復興、および「小林平埔族群文物館」[11] の展示に用いられる資料が蓄積された。文物館の展示企画は最終的に高雄市立歴史博物館が担当することになった。

4.3　小林村に関する企画展示

災害が発生する以前に、小林村にはすでに展示施設が作られていた。平埔族のなかにも民族アイデンティティの意識が強まった1990年代の後半に、台南と高雄地域では平埔族の文化を復元する活動が、研究者たちの協力によって行われていた。小林村では、1996年に、民間の研究者である劉還月と当時の小林村の長老であった王天路、周坤文が、使われなくなった小林小学校の教室を展示室として「小林平埔族館」を設立した。小林平埔族館の設立目的は、地方文化の教育、および平埔族の文化復興への意識を喚起することであった。展示では竹製の建物、祭礼台、および竹・木製の農具や狩猟道具が展示され、以前の生活の様子が再現された。しかし、この展示館は「八八水害」で流された。

八八水害の後、小林平埔族群文物館の常設展示が公開されるまでに、2つの企画の展示会が行われた。1つは2009年10月30日から2010月1月31日まで、旧甲仙郷地方文化館で開催された「小林平埔文化特展」である。この展示の企画者は、長期間にわたりこの地で調査してきた簡文敏（高苑科技大学通識中心副教授）である。この展示会の目的は、被害にあった小林村の村民の生存の窮状を訴えるとともに、平埔族文化の伝承への関心を喚起することである。災害前の「小林平埔文物館」の展示と違って、タイヴォアン人の移住の歴史と居住地の紹介、日本統治時代の抵抗運動など、歴史的要素が強調された。

もう1つは小林村の村民と研究者が共同企画し、2012年から2013年にかけて開催された、小林村に関する資料の収集成果の展示である。関連資料を収集するプロセスを小林村の文化復興の動きとみなして展示が作り上げられた。展示内容については、街の再現やかつての生活の様子に焦点が当てられた。展示物の一部は村民の手づくりの竹の生活道具であった。企画者の簡文敏は、下記のように述べている。「モノを再製作することを通じて、かつての生活の様子が再現され、災害によってもたらされたトラウマが癒されると考えた」（簡文敏 2016. 5. 8）。

5.　小林平埔族群文物館の展示の経緯

5.1　3つの移住地に分けられた村民と文物館

2013年に始まった小林平埔族群文物館の展示企画プロジェクトは、高雄市立歴史博物館と、被災後に3ヶ所にわかれて居住してきた小林村の村民たちとが中心となり始まった。小林平埔族群文物館は、旧小林村の隣の五里埔の開発計

画の一環として整備された「平埔族文化園区」内に新たに建てられることになった。小林平埔族群文物館の目的は、小林村周辺の自然環境と平埔族文化に基づいて、昔の小林村における平埔族文化を再現することにより、平埔族文化の歴史的・文化的価値を示すこととされた（高雄市政府文化局 2014: 3–8）。八八水害の記憶を残し、また地域文化を伝承する場として、博物館と地域住民の連携を通して、五里埔での小林平埔族群文物館の常設展示が作り上げられ、2014年8月2日に小林平埔族群文物館が開館した。

八八水害から3年を経過した2011年に、小林村の全住民が復興住宅に入居した。以前と大きく異なるのは、災害後の生活に対する要求がそれぞれ違うため、五里埔小林、日光小林、小愛小林という3つの異なる地域に住むことになった点である（高雄市歴史博物館 2014: 30–31）。その理由については、五里埔小林に住む人は故郷に帰って復興するという意思表示であり、日光小林に住む人はよい生活環境を求めるという要望である。さらに、一番早く完成した小愛恒久住宅区に入居する人たちは早めに生活を安定させるため、小愛小林コミュニティに入居した。

一方で、展示はかつて存在した小林村を主題としていることから、高雄市立歴史博物館のキュレーターは、文献資料の調査とともに、3つの村に分かれて移住した住民に小林平埔族群文物館の展示内容について聞き取り調査をおこなった。3つの居住地の意見は異なっていると同時に、文物館の設立に対する意欲がそれぞれ違っていた。3つの居住地の住民の間で一致していたのは、かつての小林村のメインストリートが懐かしいという意見だけであった。

当初、この方針により、小林平埔族群文物館の展示について、高雄市歴史博物館のキュレーターが、専門研究者の意見に基づいて、歴史的・文化的な展示を企画した。しかし、旧小林村は土石流に埋められ、展示に使えるモノが残らなかった。そこで、キュレーターは村民へ聞き取り調査をし、展示内容の重点を村の歴史ではなく、現地住民の声に置くことを決めた。

写真 4　小林平埔族群文物館の外観

住民とのやりとりの中から、博物館のキュレーターは展示テーマを「家に帰ろう—小林村の物語（回家—小林村的故事）」と定めた。小林村の由来、生業の道具、宗教信仰の儀式など昔の生活の様子を展示することを通して、村民たちの恋しい故郷への記憶を喚起することにした。

この展示の目的は、災害によって急激な変化を強いられた小林村の、生活と文化について、過去から現在に至る繋がりを示すことであった。歴史の紹介、過去と現在の生活の様子、文化の復興の過程について展示することによって、来館者に多角的な視点を提供し、平埔族の歴史と文化を考え直す機会をつくり出そうというねらいがあった。その結果、展示はメインストリートであった忠義路の道沿いの様子を入り口にした。また、家族の食卓を通じて、「村人は相互に来客を歓待する習慣がある」という昔の生活の様子を再現した。

5.2　再建された記憶の中の家と村民の感想

「家に帰ろう—小林村の物語」という展示は、四つのコーナーから構成される。はじめのコーナーは「記憶の中の家—小林村（記憶中的家—小林部落）」である。1904年にこの地に「小林」という名前が付けられ、1915年にタイヴォアンの人たちはこの地に移住させられた。その後、

写真５　展示場の入り口

写真６　「消えた家」の展示様子

写真７　「仮設住宅での生活」

写真８　「マイ・ホームと新生活」

さらに移住してきた漢民族と他の原住民族との接触地帯となった歴史のなかで、小林村の生活と景観が形成された。展示の内容はジオラマで忠義路や家族の食卓など生活場面を再現したもの、かつての生活記憶を住民が語る映像、伝統的な工芸や生業道具、タイヴォアン人の「太祖」信仰の展示などが含まれる。

次のコーナーは「消えた家―水害によるキズ（消失的家園―風災之痛）」である。展示を企画した際に、村民たちが被災当時の詳細な惨状を展示したくないと表明したため、このコーナーは、文物館の展示の中で最も小さい空間となっている。小さい部屋で展示されているのは災害当日のテレビニュース、新聞報道だけである。展示コーナーは縮小されたが、災害が発生した原因について観客に考えさせるいくつかの糸口も提示している。地質や雨の量など科学的な原因だけでなく、政府が行った山岳地帯における引水工事や民間の山林開発という原因も提示して、来館者自身が災害の原因を考える仕掛けが取り入れられている。

続いては「仮設住宅での生活（組合屋的日子）」というコーナーである。ここで小林村の住民の仮設住宅での生活から、復興住宅へ入居した結果、3つのコミュニティに分かれるまでの経緯を解説文、映像、模型で表現している。小林村の住民たちは「移住先の場所をどこにするのか、生業活動は何かできるのか、伝統行事をおこなう空間があるのか」など新生活を始めるために、様々な条件を考慮した。ここでの展示では、村民たちがよりよい生活環境を作るために、復興住宅の建築士と何回も検討したプロセスを示したり、また住民たちが描いた新しい居住地のイメージを展示したりしている。

「マイ・ホームと新生活（新家的生活）」は4つ目の展示コーナーである。ここでは、災害後の村民たちが未来に向けて現在の生活を営んでいる様子を展示している。生業活動の再建、伝統文化の再興・継承などに従事する様子が写真を通じて紹介されている。最後に村人たちの笑顔を展示のエピローグとし、災害を生き抜いた人びとの写真と、災害後に生まれた子どもの写真を続けて放映することで、人の命の繋がりを表現している。

このように、キュレーターは「歴史と文化」に基づいて、3つの村に分散された旧小林村の村民が生きていく立場を示した。それとともに、キュレーターは、村民たちの「家」への思いを、展示を貫く原理として、過去の記憶とこれからの生活のための活動を一連のものとして提示した。

展示を観覧した村民の感想の大半は「展示内容がいい」、「昔の小林村を思い出せる」というものであった。しかしその一方では、展示の中に災害をめぐる記述は少ないものの、展示場を訪れるたびに、思い出したくない災害に関する記憶が呼び起こされるため、必要なときしか展示場に入らないという意見も聞かれた。展示企画がいったん終了した段階で、文物館と村民の間の相方向的な連携関係が滞ってしまった。今後の課題として挙げられることは、文物館の展示・教育に関して、短・中・長期の経営政策を立てることである。

6. 考察

本稿では、台湾の災害博物館の形成過程において、災害が博物館の展示の仕方にもたらした影響と、自然災害後にあらためて設立された地域博物館に示されるタイヴォアン人をめぐる文化表象の形成プロセスを考察する。

災害後、博物館は災害に関する事実、被災した経験や記憶をどのように展示し、観客や次の世代に伝えるのか。これは常に自然災害に向き合っている台湾における博物館が考えなければならない課題である。災害をきっかけとして開始されたさまざまな展示のあり方に関する検討も徐々になされてきた。展示内容については、自然災害の科学知識を説明するとともに、災害に関連する社会的・文化的な課題も反映すべきだという指摘が挙げられた（劉 2013: 63）。さらに自然災害がもたらした被害や生活復旧をめぐる課題およびそれについての行政的な解決策を展示するだけでなく、展示には被災地の歴史と文化の背景も包含すべきという指摘もあった（王 2013: 9）。

一方、災害の形は違ったため、そこでもたらした損害と残したものも違った。博物館はそれに応じて、文化財保護と文化財救出をおこないながら、現地住民とコミュニケーションをとり始めた。1999年の九二一大地震以降に、博物館は自然災害が発生した後の文化財の救出や自然災害に関する特別展示の企画を始めた。そのほか、地震教育を促進するために、新たな博物館「九二一地震教育園区」の企画を立てた。九二一地震教育園区は、最初、地震教育を行う場所および政府の災害後復興をめぐる施政の成果として企画された。しかし、指定された九二一地震教育園区の敷地と現地住民の生活空間が重なるため、現地住民は地震教育園区の設立提案に強く反対した。彼等にとって重要なことは生活復旧と生活環境の再整備であり、自分たちの居住地域に博物館を建設する理由はすぐには理解できなかった。住民側との認識のずれを修復するため、行政側は積極的に住民側とのコミュニケーションを取り始めた。その結果、災害事件を記録する九二一地震教育園区に関する計画に関する現地住民の理解が得られるようになった。

九二一大地震から十年後の八八水害では、大雨にともなう土石流や洪水で命を落としたり、住む場所を失なったりした原住民族の人びとが多かった。そのため、災害と原住民族との関わりおよび山岳地帯の土地利用が台湾社会で関心を集めることになった。原住民族政策を担う原

住民族委員会が中心になって、原住民族への災害救助と補償の問題に対応した。政府の援助政策に対して、原住民族も被災者の立場から「尊厳ある復興」の連名書を提出した（小川・黄・石村・松岡 2012: 73–83）。

さらに、同じく災害を受けた平埔族の人々への対応が社会の中で大きな課題として浮き彫りとなった。とくに土石流に埋められた小林村の生き残った住民は、原住民族には認定されておらず、社会的・文化的補償制度は原住民族と同様なものは適用されなかった。この問題に気付いた研究者は政府に文化再建・復興にあたり必要な支援を要求する動きを始めた[12]。政府からの資金が小林村の村民の移住場所において、公共施設を建設するほかに、年中行事としての祭りをおこなうことも支援した。外部の支援を受け取るとともに、生き残った村民の間に、「私は誰」、「私たちはどこから来たの」という出自を探るプロセスの中で「タイヴォアン人」としての意識が芽生え、民族としての一体感も徐々に形成されるようになった。

八八水害をきっかけとして、台湾の原住民族と平埔族に関する伝統領域で暮らす権利という課題が注目されるにつれて、有形と無形文化を収蔵・展示・教育する社会教育施設である博物館は、文化再建と伝承をめぐる課題に関心をよせるようになった。八八水害後に、博物館は歴史的な収蔵資料を用いて、専門家と博物館キュレーターが企画した展示内容を現地住民と議論しながら修正した。それを通じて、現代の平埔族の生活と文化伝承に関わる展示を完成させた。展示には狩猟の際の道具、視覚的な表現ができる刺繍工芸品と多種類の竹製品などをもちいて、小林村の生活を再現することで、自らのタイヴォアン人としてのアイデンティティを呼び起こす傾向が生じてきたといえる。

平埔族に関する文化復興、特に災害後博物館の動きでは、収蔵品や展示が文化の象徴と見なされ、復興と文化再建の方法として使われている。1996年～ 2014年までの小林村を中心にする展示の変化を時系列で考察し、小林村をめぐる小林平埔族館（1996年）、小林平埔文化特別展（2009年）、小林村に関する資料の収集成果の展示（2012年～ 2013年）、「家に帰ろう―小林村の物語」特別展示（2014年）、という4つの展示を比較すると、2009年から2013年までの展示には地域の歴史をめぐる要素が出てきたことがわかる。さらに、2014年に開かれた公式の常設展示では、地域の歴史を加え、かつての生活を踏まえて、文化再興を展望することになった。

博物館の展示に表象された小林村をめぐる民族文化像は、平埔族一般から、徐々に「タイヴォアン人」に限定されてきた。展示という装置が「タイヴォアン」文化を表象する役割を果たしたといえる。元小林村の村民にとって、小林平埔族群文物館は「大切なものを見つける」場所である。展示では、村民がもっとも懐かしいと感じる生活環境、人と人の間にある緊密な繋がり、そして心のよりどころとなる信仰・儀式が示されている。したがって、来館する観光客にとって、この博物館は、タイヴォアン人の歴史・文化、そして被災後の地域の生活復旧について理解を深めていくことができる場所になりうると考えられる。

近年、博物館は単にモノを収蔵する場所あるいは一方的な表象装置ではなく、キュレーターと収蔵・展示される側の双方向・多方向の交流の装置であると認識する見方が、研究者の間で共有されてきている（吉田 2013）。小林平埔族群文物館の展示を企画した際に、村民、行政側の企画者および研究者の協働作業により、村民が文物館の展示の企画に意見を提出する権限が与えられた。災害後に建てられた小林平埔族群文物館は最初、専門家会議が展示の枠組みを提案したが、その後現地住民を常設展示の内容の立案に参画させ、住民の視点を中心とし、住民の思いを表す展示を試みた。たとえば、かつて村生活の中心とした忠義路の再現、および水害

をめぐる展示の最小化などがあげられる。

社会教育施設である博物館は、モノを展示する場所だけでなく、展示を通じて、歴史や先人の経験を伝え、未来を築く基礎を積み重ねる場所でもある（吉田 2011: 224）。そのため、記憶を保存することは博物館の役割の1つと考えられる（陳 2007: 48）。それを実現するため、地域に根付く博物館は、村民・地域社会とお互いに理解し合うことも考えなければならない。しかし、異なる立場にある博物館キュレーターと地域住民は、それぞれに理想と目標が違うため、地域博物館に対する期待のずれが生じる可能性もある。

小林平埔族群文物館の設立目的は、平埔族の文化と歴史の価値を示して、地域復興を促すことである。しかし、前に述べたように、村民は必要なときしか展示場にこない、さらに展示企画が終わってから、村民と博物館の相方向的な連携関係は滞ってしまっている。そこでは、地域に所在する小林平埔族群文物館と地域住民との間の連携がうまく機能せず、設立当時の理想と相違する部分が生じたことが指摘できる。

7. まとめ

本稿では、台湾における災害博物館の設立経緯を振り返り、災害後の博物館の対処の仕方、および博物館の敷地の周りにあるコミュニティの反応を検証した。また、タイヴォアン人の居住地の1つの小林村に関する展示を比較し、タイヴォアン人の文化表象と民族的アイデンティティが形成されるメカニズムを検討した。

九二一大地震の後、博物館は自然災害の成因と防災の説明、および地震で損害をうけた歴史的建造物の修復に重点をおいた。ここでは、原住民族をめぐる被災や文化復興の議題がそれほど注目されていなかった。一方、自然災害に襲われた被害状況を記録するための博物館を設立する際に、博物館の災害教育の役割がまだ不十分であることが認識されるようになった。博物館は所在地の周辺に暮らしているコミュニティ住民の気持ちや意見に耳を傾けて、コミュニケーションをとることにより、地域にある博物館が継続していくことができる。

八八水害により、原住民族の集落は極めて大きな被害や変化を経験した。多くの原住民は原居住地から強制的に移住させられ、もとの生活環境と生活方式から切り離され、自らの文化の存続の可能性を疑った。この危機に直面しながら、被災地の復興に当たっては、文化再建をめぐる姿勢が強く要求された。それにしたがって、博物館は自然災害が原住民族の生活・文化に与える影響に関心の目を向け、原住民族が直面した文化の窮状やそれに対する文化復興の動きに協力したり、展示を通じて原住民族の主張を発信したりするようになる。このようにして、災害後に民族の内部において徐々に民族的アイデンティティが強くなっていくが、そのプロセスで、タイヴォアン文化像を作成した博物館の展示も役割を果たしたと考えられる。

また、地域博物館が記憶・文化伝承にもたらした影響についてみれば、展示企画の協働により、小林平埔族群文物館の中に、小林村民の個人レベルの記憶、および村民の共同の生活経験が現れるようになったことが指摘できる。小林平埔族群文物館は地域博物館として、記憶・文化伝承に貢献したという点で評価できる。しかし、開館後、村民との連携関係がとれない状況となり、地域博物館として、積極的な機能を果たしているとはいえない。この開館後の文物館と村民とのコミュニケーションの問題について、別途議論が必要であろう。

小林村における博物館活動を通じて、博物館と地域コミュニティの関係について3つの課題を指摘しておきたい。第一に、地域博物館としての小林平埔族群文物館が継続的に現地住民と連携関係を築いていくことである。すなわち、現在村民が民族的アイデンティティを形成するために、積極的に平埔族の正名運動と文化復興に取り組んでいる動きに、博物館はどのように協

力するのか。第二に、その成果を反映するコミュニケーションの仕組みを作り上げることである。

第三に、展示に入れられなかった八八水害をめぐる被災の経験と記憶は風化していく恐れがある。次の災害に備えるため、筆者は被災をめぐる記憶を保存すべきだと考える。村民の記憶が変化していく状況の中で、博物館には災害に関する語りの収集と資料整理を慎重に進めることが期待されている。これらのことは小林村の博物館の課題であると同時に、筆者の今後の研究課題としてさらなる検証を重ねたい。

注

1）九二一大地震は、1999年9月21日1時47分に台湾中部の南投県集集鎮を震源とするマグニチュード7.3の地震である。台湾全島に被害をもたらした。人的被害のほか、建物の倒壊および公共施設の道路、橋、校舎などに甚大な被害をもたらした。

2）八八水害とは、2009年8月7日から8月10日にかけて、台湾を襲ったモーラコット台風（平成21年台風第8号）がもたらした豪雨による被害を指す。

3）日本で「先住民（Indigenous）」と呼ばれる人たちは、台湾の状況において、「原住民」と呼ばれている。

4）「党外勢力」というのは、1980年代当時は「国民党」以外の政党が認められていなかったために、このような表現をされていた勢力のこと。その後、民主社会進歩党になっていく勢力である。

5）台湾原住民の正名運動は、最初は1984年に「台湾原住民権利促進会」を設立し、原住民として法的地位をもっている人たちを指す「山胞」という言い方を「原住民」という名称に変えるという運動であった。（1994年に「原住民」という名称が憲法に入り、1997年に憲法改正により「原住民族」という言い方が定められた。）次は伝統姓名の回復の要求である。この要求は2003年に漢族と原住民族の名前の両方とも登録ができて、原住民族の姓名を保つことができるようになった。

6）サオ族は台湾南投県の日月潭の周辺に暮らしている原住民族である。サオ族は、清朝以降に漢族移民と接触し、日本統治時代に移住させられたため、固有文化が早くに失われた。観光地として日月潭の周辺が開発されるとともに、サオ族の人々の生活も変わってきた。

7）クヴァラン人は台湾東海岸地域に居住する原住民族の1族である。クヴァラン族は、漢族移民と接触して以来、多くの固有の慣習を失って、漢化の道をたどった。そのため、クヴァラン族は平埔族に分類される（清水 1992: 15）。

8）本協会を設立する時点に参加した研究者は、暨南大学人類学研究所所長潘英海、台東大学の林清財、東華大学民族学院院長の施正鋒、中央研究院研究員の康豹、台湾原社秘書長の以撒克、台湾原住民族学院促進會の巴努理事長、小林コミュニティのもと理事長林建忠、小林コミュニティ自救會の代表の蔡松瑜、高苑科技大学の簡文敏、台南市シラヤ族文化促進会の理事長の段洪坤などである。

9）八八水害が起こった直後の9月1日に、中央研究院でシンポジウム「気候の変遷、国土の保全と台湾原住民族の社会文化をめぐる未来」（氣候變遷、國土保育與台灣原住民族的社會文化願景）がおこなわれた。原住民族を遷移すること、国土を利用することなどが議論された。シンポジウムの概要は下記のサイトにのせている。http://www.ianthro.tw/p/5735

10）八八水害が起こる4日前、2009年8月4日に国立台湾博物館は「采田福地―台博館蔵平埔族伝説」（「采田福地―国立台湾博物館の平埔族収蔵資料展」）という特別展示を開いていた。災害発生後、社会の一般人にタイヴォアン人の生活と文化を深く理解してもらうために、博物館において「小林平埔部落の形成と文化」をテーマとして講演会が開かれた。そうすることで、タイヴォアン人の存在は「遠い被災者」ではなく、来館者と身近な存在だという考え方を提示した。

11）台湾の博物館法で「博物館」の定義は、明確な設立者と管理者がある非営利の機構である。また、博物館運営に関わる仕事を担当する常勤スタッフがおり、年200日以上開館する機構である。したがって、上記の条件を満たす「文物館」、「美術館」、「記念館」、「水族館」、「動物園」、「植物園」や「水族館」は博物館と見なされる。

12）たとえば、研究者と地域住民は「台湾小林平埔原住民族文化再建協会」を設立した。行政院原住民族委員会は、恒久住宅の建築デザインや文化景観の再構築のため、原住民族の建築文化を反映したデザインを採用する政策を立てた（小川・黄・石村・松岡 2012: 76–78）。

参考文献

日本語文献

小川正恭・黄智慧・石村明子・松岡格編
「台湾原住民族と八八水害」『台湾原住民研究』16: 69–122。

林清財（石村明子訳）
2015 「研究者と災害支援「台湾平埔原住民族文化学会」の誕生」『台湾原住民研究』19: 187–198。

清水　純
1992 『クヴァラン族―変わりゆく台湾平地の人々』京都：アカデミア出版会。
2005 「平埔」綾部恒雄 監修者、末成道男、曾士才　編者『講座　世界の原住民族―ファースト・ピープルズの現在―　01 東アジア』pp. 106–123、東京：明石書店。

布谷知夫
2011 「博物館における教育II―生涯教育の展開―」吉田憲司編『博物館概論』放送大学。

吉田憲司
2011 「記憶と博物館」吉田憲司編『博物館概論』放送大学。
2013 「フォーラムとしてのミュージアム、その後」『民博通信』140: 2–7。

中国語文献

王嵩山
2002 「論災害博物館學的形成」『博物館學季刊』16(4): 5–6。
2003 『差異、多樣性與博物館』稻鄉出版社。
2012 『博物館與文化』遠流。

王瑜君
2013 「誰的災難？哪一種氣候變遷？論風險社會中博物館展示挑戰」『博物館與文化』5: 3–48。

呉延晃
2006 「災難下的物體系：九二一地震後物件博物館化的故事」『博物館學季刊』20(2): 31–46。

李永裕
2010 「「小林平埔族群文物館」開館首展籌畫調查研究計畫」国立台湾博物館研究報告、未出版。http://www.ntm.gov.tw/upload/download/20111026/0f8ffb2c-662e-4152-8704-3c207f8b3e7e. pdf（2016年1月検索）

周晶生
2002 「九二一地震博物館規劃在社區中的實踐歷程」『博物館學季刊』16(1): 15–25。

洪麗完
2009 『熟番社會網絡與集體意識―臺灣中部平埔族群歷史變遷』聯經。

高雄市政府文化局
2014 「小林平埔族群文物館中長期（3年）營運管理計畫」（修訂版）。http://morakotrecord.nstm.gov.tw/88flood.www.gov.tw/files/committee_other/180.pdf?id=180&type=pdf&location=committee_other（2014年11月検索）

高雄市歴史博物館
2014 『回家―小林村的故事』展示ガイド（未出版）。

陳佳利
2007 『被展示的傷口：記憶與創傷的博物館筆記』典藏藝術家庭。

陳叔倬
2013 「天然災難後臺灣各博物館的公共參與：以九二一地震與88風災為例」『博物館與文化』5: 87–103。

黄智慧
2011 「八八災後原住民族文化守護：理念與實務之落差」『行脚西拉雅』国立台湾歴史博物館。

張譽騰
2003 『博物館大勢觀察』五観芸術。

劉德祥
2013 「科學博物館作為科學溝通的媒介：災難議題的展示」『博物館與文化』5: 49–64。

The Relationship Between Exhibitions about Natural Disasters and Construction of Ethnic Identity in Taiwan

LU Yiping
Department of Comparative Studies,
School of Cultural and Social Studies,
SOKENDAI (The Graduate University for Advanced Studies)

Summary

This study focuses on the establishment of museums after natural disasters and the exhibitions held there. Using the exhibitions in Earthquake Museum of Taiwan and Shiaolin Pingpu Cultural Museum as case studies, this paper examines the process of planning exhibitions after natural disasters, while also investigating the construction of ethnic identity among the Pingpu indigenous people.

After 1980s, along with the democratization of Taiwan society, indigenous people started to assert their rights, such as human rights, land rights, cultural and linguistic rights, and the right to autonomy. Through these movements, the Taiwanese population became well aware of the issues concerning the rights of indigenous people. In 1994, the rights of the indigenous people were included in Article 10 of Additional Articles of the Constitution of The Republic of China. Following this trend, in the late 1990s, the Council of Indigenous people founded 30 museums exhibiting the culture of the regional indigenous people in order to give a presentation of indigenous culture and history within those local societies.

After the 1999 Jiji earthquake, museums in Taiwan started touching upon issues of natural disasters and their impacts. In this period, museums focused on rescuing items of cultural heritage and repairing historical architecture, but did not pay much attention to the relationship between natural disasters and indigenous people. But ten years later, Typhoon Morakot destroyed many towns and took many lives, especially those of the indigenous peoples. It forced the museums to reconsider what the role of the museum was in this case, as an institution of social education. After the typhoon, public museums both near and far from the stricken area have devoted themselves to rescuing items of cultural heritage, and also to helping victims to weather the hard time after the disaster. Furthermore, the government announced its decision to create the Shiaolin Pingpu indigenous museum, to commemorate this disaster and revive the Pingpu culture of Shiaolin village.

In creating its permanent exhibition, the Shiaolin Pingpu Cultural Museum listened to and adopted the villagers' suggestions, as well as using regional history to offer a representation of the lifestyle in Shiaolin Village in the past. Through this process, we are able to observe the gradual formation of ethnic identity of the Pingpu people in Shiaolin Village. The next challenge for the Shiaolin Pingpu Cultural Museum is to interact more with the local residents, and to record narratives about the disaster which are not included in the permanent exhibition.

Key words: museum of natural disaster, museum exhibition, Pingpu indigenous, Taivoan people, ethnic identity